

古代の大分

古代の主な遺跡

加原遺跡（大野町桑原）では平安時代の大野郡関連と考えられる大型建物跡が並んで見つかっています。柱穴の径は一辺 80cm 前後と大きく、9 世紀から 12 世紀にかけての高床式倉庫などの各種建物群 27 棟などが見つかりました。大野郡関連の建物とも考えられますが有力豪族の屋敷ともみられています。


加原遺跡の建物跡

そのほか古市遺跡（朝地町市万田）では平安時代前期の祭祀跡とみられる遺構がみつかり、大園遺跡（千歳町下山）でも平安時代の建物群の跡がありますが、この時代の遺跡は少なく不明な点が多く残ります。

また律令体制のもと、公有化された土地を人々に等しく配給する班田収授法の制定に伴い、条里（じょうり）制が施行されました。条里とは古代の土地区画制度で、一辺約 108 m四方の碁盤目状の地割りが全国でみられます。市内では緒方川流域の緒方盆地一帯でその名残があったことが確認されています。


緒方盆地の条里の地割り（昭和 21 年ころ）

平安時代より仏教の消滅を恐れる末法思想が広がり、仏教の経典を入れた容器である経筒を地中に埋納することが全国的に流行します。経塚と呼ばれる埋納遺構は、緒方町の三宮八幡社と大行事八幡社から江戸時代までに 5 個分の経筒が発見されたと伝わりますが、そのうち 3 個体分が現存しています。


経筒（左：三宮八幡社、右：大行事八幡社出土）

大神一族関連の伝承地

豊後地方で平安時代後期より登場する武士団として知られる大神一族には、多くの伝説が伝えられています。初代大神惟基にまつわる緒環伝説のゆかりの地として、宇田姫社・萩塚（清川町三玉）があります。

大神一族は、12 世紀頃に一族を率いた緒方惟栄によって勢力を拡大し、源平の戦いでは源氏側の勢力として活躍します。彼の本拠地である緒方町内には惟栄の館跡（緒方町上自在）や創建に関わった

と伝わる宮迫東西石仏、一宮・二宮・三宮八幡社、緒方下井路など多くの伝承地が知られています。大神一族は鎌倉幕府に抵抗し、神角寺の合戦で終焉を迎えたと伝えられています。



緒方惟栄館跡伝承地

●中世

平安時代以後に台頭してきた武士は、強い政治力を持つ権力者に成長していき、中央には幕府による政権が成立し、地方には有力御家人を守護として配置する封建制度による支配体制を確立していきます。やがて行政上の実権を握るようになった各地の守護は、大名として勢力争いも激化させていき、戦乱の時代を迎えるようになります。

豊後国では守護大名として配置された大友氏が、代々統治していました。21 代目の義鎮（宗麟）の頃には北部九州一帯にまで勢力を広げ、南蛮貿易などの対外政策を積極的に進めて戦国大名として成長していきます。一方で各地で戦いを繰り広げ、薩摩の島津氏による侵攻を受けて衰退していきます。大友宗麟の跡を継いだ大友義統の朝鮮出兵での失態を理由に豊臣秀吉によって改易されて以降、代わりに配置された大名たちによる小藩分立の時代を迎えます。

中世の仏教遺跡

貴族や地方武士の保護を受けた仏教は、数多くの磨崖仏や山岳寺院が建立されていることから、当地方にも浸透していたことがわかります。特に磨崖仏はこの地域に多い熔結凝灰岩の岩壁に彫込まれ、市内では代表的な文化遺産として知られています。平安時代後期の大神一族との関わりが推定される菅尾磨崖仏（三重町浅瀬）や緒方宮迫東・西石仏（緒方町久土知）のほか、犬飼石仏（犬飼町田原）・普光寺磨崖仏（朝地町上尾塚）などその姿も様々です。

鎌倉時代以後は民衆の救済を目指したさまざまな教えのもと、石造塔の造立が広がっていきます。その目的は納経・供養・祈願など様々な信仰を反映したもので、凝灰岩の豊富な石材にも恵まれ、当地域では多種多様な石塔が見られます。作塔の傾向として、宝塔や五輪塔から作られはじめ、南北朝時代より宝篋印塔、中世後半以降になると、石幢や笠塔婆などが作られ、それぞれ彫刻作品としても優れています。



中世の石造塔（表宝篋印塔）

大友氏関連の遺跡

豊後の守護大名大友氏は、鎌倉時代より安土・桃山時代にわたって豊後国を統治し、その菩提寺とされる寺院が市内にもあります。



伝能直の墓塔（常忠寺）

初代能直は京都で没したとされていますが、勝光寺（大野町藤北）が菩提寺とされ、近くの常忠寺に墓石と伝えられる五輪塔があります。

ほかに 4 代親時は大楽寺跡（三重町久田）、13 代親綱は大聖寺（犬飼町柴北）、14 代親隆は宝生寺（清川町宇田枝）と、それぞれ菩提寺とされる寺院がありました。

中世城館の遺跡

市内には戸次氏、志賀氏、一万田氏など大友氏の有力な家臣のほか多くの武士の領地がありました。こうした領主層の屋敷跡や城館跡の築造が行なわれるとともに、戦乱に備えて山頂や丘陵上に数多くの城や砦が築かれていきます。

一万田館跡（朝地町池田）は、現在残る土塁や発掘で確認できた堀などから 100 m四方ほどの規模であったと考えられています。他にも惣田遺跡(三重町菅生）や上門手遺跡（千歳町下山）などで、有力武士の屋敷跡と考えられる遺跡が見つかっています。



一万田館跡の建物柱跡

城や砦などは、戦いの際の拠点として山頂や丘陵の地形を利用して築かれるもので、兵が駐屯する曲輪（郭）、敵の侵入を阻む堀・土塁など防備の構築跡が現在も残っていることがあります。

鳥屋城（朝地町鳥田）は、一万田氏の詰城として築城され、山頂の広範囲に複数の曲輪を配置し、尾根上に土塁を巡らせています。

高城(大野町酒井寺）も多数の曲輪を造成させ、鎧ヶ岳城（大野町藤北）とともに戸次氏の詰城であったと考えられています。

烏嶽城（緒方町中野）は、尾根上の曲輪と大規模な土塁を配置する城跡で､高尾城（緒方町軸丸）は、広大な主郭の周囲に多数の階段状の帯曲輪を配置する規模の大きな山城です。小牧城（緒方町野尻）は、三方を河川に囲まれた地形を活かした城跡です。

小牟礼城（朝地町市万田）は、一万田氏の城と伝わりますが、築城技術的には中川氏による岡城の支城としての築城と考えられています。このほか高旗城（犬飼町)、栗ヶ畑城（犬飼町）など確認されています。

天正 14(1586)年の薩摩の島津氏の侵攻の際、各地の武士団は山城に立て籠もって抵抗します。しかし島津氏は松尾城（三重町松尾）を侵攻の拠点として各方面で大友氏側を圧倒していきます。

松尾城は通常の山城とは異なる構造で、谷間を囲む山腹から麓の旧広福寺跡まで階段状に曲輪群が数多く設けられています。広福寺跡の広い平坦地を本陣としての中心的な施設とし、谷間の曲輪群は兵士の駐屯場所として、山頂の曲輪は物見として使用されたと考えられます。また 16 世紀後半～末の輸入陶磁器などが出土しており、府内（大分市）から後退した島津軍により持ち込まれたものと考えられます。



松尾城の陶磁器出土状況

中世の埋葬遺跡

中世の民衆は村落など共同体としてのつながりを深め、同じ神仏を信仰し、埋葬地を同じ場所に設けるようになります。千人塚遺跡(緒方町下自在）は、盛土による 170 基の墓地の遺跡で、室町時代から江戸時代の 200 年間にわたって造営された集落墓地であったことがわかりました。盛土内には土葬墓や火葬墓などさまざまな埋葬形態があり、一部には石塔などの墓標を有するものもありました。


千人塚遺跡の墳墓群

また、大友宗麟は南蛮貿易とともにキリスト教信仰を保護する政策を行ない、領国である豊後地域には多くの信者が居たと考えられます。こうした人々によりキリスト教式の墓地が数多く造営されました。大友氏改易後も江戸時代初め頃までは信仰は続きましたが、慶長 17（1612）年以後の江戸幕府の禁教令による弾圧を受けるようになり、これまでのキリシタンの墓地は仏教式の墓地へと改変され姿を消していきます。

その中で岡なまこ墓（大野町後田）は伏碑の下に石組遺構がある構造を持ち、江戸初期のキリスト教式の埋葬形式が垣間見える遺跡です。


干字クルス

また干字クルス（朝地町市万田）は、十字架が浮き彫りされており、礼拝用の施設であった可能性が高いものです。

中世の刀鍛冶

甲斐本（賀井本）鍛冶は三重町久田に居住していた刀工で、大友氏に仕え、武器制作に携わっていたと考えられています。中世の刀工に「行久」が知られており、大友氏の御用鍛冶として作品が残されています。その他に市内では大野町や朝地町でも刀工の活動による作品が知られています。戦国時代が終わり江戸時代以後も臼杵藩の庇護を受けて刀鍛冶は続き、甲斐本鍛冶も「行長」や「行家」などの刀工により、江戸時代中期頃まで刀が生産されていたと考えられています。

現在でも中尾には「鍛冶元」という地名があり、残された作品や当地の墓石群などから、かつての職人たちの活躍が偲ばれます。


甲斐本鍛冶関連の墓地